

江戸期における福崎の俳人たち

〈俳書・俳額調査を中心として〉

常民学会代表 難波 正 司



はじめに

いにしえの時代より播磨は豊かな地であり、特に近世の庶民文芸のなかで大きな位置を占める俳諧とゆかりが深い土地柄でもあった。「俳聖」と称された松尾芭蕉翁は、貞享五年（一六八八）四月下旬に兵庫より須磨・明石まで訪ね、その紀行『笈の小文』の旅で、

月はあれど留守のやうなり須磨の秋

蛸壺やはかなき夢を夏の月などの名吟を得ている。この旅から十年後、丹波生まれの女流俳人として著名な田捨女は、播州網干の龍門寺で没している。さらに、小林一茶は寛政七年（一七九五）春に讃岐からの帰路、山陽道を有年から斑鳩、書写、姫路城下を経て曾根、高砂へと向かっている。高砂では松岡青蘿

門の田中布舟亭に泊まり、

先しるき前の池哉さくら哉

と詠んでいる。このように、播磨は名高い俳人との関わりをもった地なのである。

一八世紀に入り、全国的に俳諧が流行したとき、ここ播磨においても例外ではなく、有力な俳人が各地に陸続と輩出している。姫路では井上千山・寒瓜父子にはじまる風羅堂一派があり、また加古川では少し時代は下がるが、松岡青蘿・玉屑らによる栗の本一派が勢力を誇り、これらは江戸期の播磨における二大俳壇であった。

風羅堂一派は、芭蕉翁の高弟広瀬惟然が元禄年間に来姫したのを期に、千山らの姫路城下の俳人がこぞって蕉門に入門したのにはじまる。惟然の没後、彼が翁より譲り受けていた遺品は千山が引き取ることとなった。芭蕉翁像と翁の遺品とされる簑、笠などである。それらの什物は一派の象徴となり、現在まで延々と受け継がれている。

もう一つの俳壇である栗の本一派

は、松岡青蘿にはじまる。京の与謝蕪村らとともに蕉門中興俳諧六大家の一人に数えられる青蘿は、芭蕉翁を仰ぎ蕉風俳諧の復興に尽力した。

青蘿とその数三千といわれる門人たちは、数々の俳書を刊行し、また芭蕉翁句碑を建立したりと精力的に活動した。青蘿没後、栗の本の号は玉屑・梧庵・可大・必山らへと明治初期まで受け継がれていくこととなった。

この二大俳壇は播磨全域に勢力を誇り、現在の福崎町にも当時の俳書に入集したり、俳額などに名を残した俳人は少なからずあった。本稿では、福崎で活躍した江戸期の地元俳人について、風羅堂一派と栗の本一派の俳書それに寺社に残されている俳額の調査などから近世福崎俳諧史の素描を試みたいと思う。

俳書に散見される福崎の俳人

福崎地方で俳諧を嗜む人が俳書に登場する比較的早い例は、風羅堂系の俳書である千山編『印南野』（元禄九年、千山序・来山跋、播陽書肆井上板）においてである【表I】。同書によれば、福崎では西治村の風聲・一葉・不省、福田村の味愈それに高橋村の不及の名が見える。彼らの発句を「四季之発句時節前後」から幾

つか紹介しよう。

樽なけて水かけ合や夏のくれ

西治村

風聲

簑を干所にそあれ河柳

同

一葉

夏野にもまきはせぬかはなし牛

同

不省

一昨日の雨もて来るや初桜

フク田村

味愈

村雨にも、の口とく木わた哉

高橋村

不及

また、同書において千山と西治村

の風聲は溝口村の可侯を加えて三吟

半歌仙を巻いている。表六句を示す。

見合てふんとはつす夏野哉

風聲

管かたひらの汗くさい事

千山

窓の月居ながらそこに假寝て

可侯

や、茸の焼過る也

聲

とも舟をさしおくれたる秋の風

山

こくとく道の案内とふ人

侯

千山編『花の雲』（元禄一五年、誠

齋序、鳥落人跋）にも西治村の風聲

が七句、一葉が一句、高橋村の桃栗

が一句、合計九句が入集している。

各人一句ずつ示す。

【表1】江戸期の風羅堂系の俳書に見える福崎の俳人

俳書	出版年	福崎の俳人
千山編『印南野』	元禄9(1696)年	風聲・一葉・不省(西治)、不及(高橋)、味愈(福田)
千山編『花の雲』	元禄15(1702)年	風聲(西治)、桃雫(高橋)
惟然編『二えふ集』	元禄16(1703)年	風聲(西治)
千山編『當座拂』	元禄16(1703)年	風聲(西治)、闇烏(新町)、桃雫(高橋)
布流編『又花の雲』	宝永2(1705)年	風聲・拳桃(西治)、桃雫(高橋)
千山編『俳諧みの塚』	正徳2(1712)年	風聲・拳桃(西治)、寸竜・豊風(井ノ口)、闇烏(新町)
旦海編『鹿子の渡』	享保7(1722)年	風聲・拳桃・橋古・つね女(西治)
寒瓜編『雪の棟』	延享元(1744)年	風聲・むら・拳桃・桃雨・里桃・野艸・沙明(西治)、桃牛・拾禾・夫丸・子鳳・小汐女(吉田)、賤一・丹之(新町)、梅月(長目)、素牛・梅玉・拾男(八反田)、桃醉・夫若(辻川)
寒秀編『花実巻』	延享4(1747)年	風聲(西治)、竹秋亭丹鶯(新町)
寒瓜編『簞のいしぶみ』	寛延3(1750)年	丹鶯・有之(新町)、風聲(西治)
寒瓜編『五々の冬』	寛延3(1750)年	丹鶯・鳳鶯・哲鶯(新町)、風聲【八十余翁と記す】・野艸(西治)
丹頂堂寒瓜歳旦帳	年号不詳	桃醉(辻川)、麦笛(福田)
寒秀編『障子帟』	宝暦2(1752)年	丹鶯(新町)
千明編『時雨會集』	寛政11(1799)年	一貫(西谷)
千明編『風羅念佛集』	享和3(1803)年	竹葉(余田)

蓮の実の飛や時々ちよんぶりと

西治 風聲

はつ霜やとちらむいても海の上

高橋 桃雫

はるさめにさはは碁盤の置所

西治 一葉

芭蕉翁の高弟鳥落人(広瀬惟然)の来姫のち、千山ら地元の俳人は

惟然調いわゆる口語調俳諧に傾倒していった様子が同書から窺える。し

かし、この惟然調は一時期のことであり、千山自身も晩年には蕉風の俳

諧に落ち着くこととなった。福崎の俳人が最も多く入集している俳書は、寒瓜編『芭蕉翁半百忌

雪の棟』(延享元年、京の井筒屋庄兵衛刊)であり、芭蕉翁五十回忌に播磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

磨國増位山山麓に風羅堂を建立し、

乗合の咄し腰折ほとときす

サイチ

岩の間から水波出て出る

サイチ

また、同書に入集している十五人の俳人の発句を一句ずつ紹介しよう。

鳥ひとつ眠て居るや塚の霜

サイチ

伊達もなく世そ打抜く枯尾花

サイチ

夢そ夢そ月ハ枯野に照ながら

同

けふそア、五十年の夢の帰花

同

山川の無事や枯野の夢の杖

同

同

龍仙

里桃

風聲

野艸

里桃

沙明

桃雫

同

同

同

同

同

同

同

同

そき袖の時雨やむかし物かたり
同風聲妻 むら
見よけふも雪に其名ハ埋もれす
シン町 丹之
蓋とれハどこの木の葉そ旅硯
同盲人 賤一
観すれハ粟炊く間そ月の霜
ヨシタ 夫丸
在スなら誉やう問て冬の月
同 子鳳
音なくて世に鳴や雪の簞と笠
同 小汐女
左右より中にも高し雪仏
辻川 桃醉
つたへ聞この簞笠や雪のさな
八反田 梅玉
手を結ふ石に尊し苺の霜
同 拾男
見よやそも道踏あけし雪の杖
同 素牛

『印南野』、『花の雲』、千山編『俳諧みの塚』(正徳二年、千山序、城西散人跋)、『芭蕉翁半百忌 雪の棟』、寒瓜編『簞のいしぶみ』(寛延三年、能移序、子竜跋、寒瓜跋)など数々の風羅堂系の俳書に登場する俳人がいた。西治村の風聲(別号は竹翠軒)である。ところが、彼は生没年ばかりでなく通称も明らかでない。彼の生没年は確定できないが、寛延三年(一七五〇)に寒瓜が編集

している『俳諧五々の冬 春曙庵追善』（寒瓜序、盾山跋）に入集している彼の発句に、

空十方花と手向や雪の艶

西治八十余翁 風聲

とあることから、生年は一六七〇年代頃であり、没年は同書に「西治八十余翁」とあり、それ以後の俳書に彼の名を見出せないことから一七五〇年代頃と推測される。また、風聲は元禄九年（二六九〇）の『印南野』にはじめて入集しているので、句作をはじめたのは二十代後半のことであり、妻のむらとともに俳諧をたし

なんでいたことが窺える。千山・寒瓜父子らと俳交を重ね、この地方における俳諧の指導的立場にあつたと思われる。特に、風聲の出身地の西治村からは、妻のむら・一葉・不省・挙桃・橘古・つね女・桃雨・里桃・野艸らの俳人が数多く輩出している。

天明期（一七八一〜八八年）になると、加古川の松岡青蘿を祖とする栗の本の俳系が勢力を誇るようになつた。まもなく有力宗匠となつた青蘿は、寛政二年（一七九〇）、闕更とともに京の二条家俳諧の宗匠に抜擢された。ついに彼は俳諧師として最高の榮譽を得たのである。二条家俳諧とは、京の二条御殿に俳人が召されて二条家当主の発句をいただき、

召された連衆で連句を巻くというものである。それは寛政二年に暁台が

宗匠に召されたのにはじまり、彼はその二回目の「紅葉の御会」に召された。『二条家御俳諧記』には「統

いて播磨青蘿・京東山高桑闕更、被召出蒙宗匠免許。同十月十六日、青蘿御会を勤」とある。青蘿は二条家俳諧宗匠として、玉屑・五齡・李雨・梅居・蝸国・五栗・桃睡・松溪・右契・瓜涼・布舟ら栗の本一門を引き連れて京に上つたのである。その折に、かねてから親交のあつた福崎新町の志水五艸宛に書簡を送っている。

御手昏恭致拜見候。先以霜寒甚御座候節弥御清福被成御暮奉珍重候。然ハ此度二条殿下御俳かいも首尾よく候。十六日御興行有之。殊外評判宜大慶いたし候。貴兄御事も御名代を則御免許下され候。無程我等持参可仕候。随而為御祝儀金子二百疋遠路御恵投忝受納いたし候。近日帰郷之上別々可申述候。以上

十月廿日

青蘿

五艸様

（『福崎町史』第四卷資料編Ⅱ）

右の青蘿の五艸宛書簡によれば、青蘿は京に上り、十月十六日に二条家俳諧興行「紅葉の御会」で宗匠を

務め、「評判宜大慶いたし候」だったと記している。当書簡には年号がないが、青蘿が二条家俳諧興行の「紅葉の御会」で宗匠を務めたのは寛政

二年（一七九〇）のみであるので、この年の十月二十日発信の書簡と考えてよいであろう。御会の開催には、二条家への「御館入御賄金」として、必ず金銭の授受があつた。二条家が俳諧免状を出し、青蘿と同行した連衆もその分に応じた金子を献じたようである。五艸も京に上っている青蘿に「金子二百疋遠路御恵投」したようである。

また、栗本玉屑の五艸宛書簡（日付は十五日とのみ記載してあるが、俳諧興行日の前日の発信とは考えられず寛政二年九月十五日と推定され、青蘿書簡と同じ年か）には、

・・・（前略）・・・二条様御事、弥此節蕉門俳諧御取立、江戸へも御沙汰有之、暁台宗匠相濟、尾州より門人卅人はかり登り申候而、河原御殿二而御会御座候。然処先尾播宗匠を以俳諧式等諸事被為及御相談、諸事諸大夫へ引合、宗匠二思出趣暫処御延引願参候。・・・（中略）・・・委細之儀御面上、右御殿二出申かたき人ハ名代を立御免状を宗匠受取相渡し申事、何分書面ニハ申上かたく候。少も山

かかりたる事ハ無御座候。右様御承知可被下候。頃日御恵借之品ハ御目かかり御返納可仕候。早々以上

十五日

五艸様

貴下

玉屑

夫ニ付少し御祝銀も仕事、是も暁台、青蘿子之了簡也事。

（『福崎町史』第四卷資料編Ⅱ）

とあり、暁台宗匠は寛政二年九月五日の二条家俳諧興行に尾州（尾張）より門人三十人ばかり引き連れて京に上つた。京では播磨の青蘿宗匠と俳諧の諸事について相談したようである。前出の青蘿書簡と照らし合わせると、五艸は俳諧興行には参加せず、「御殿二出申かたき人ハ名代を立御免状を宗匠受取相渡し申事」と、代理人を出して俳諧免状をもらったようである。

二条家俳諧興行の翌年の寛政三年（一七九一）に、再び青蘿は三月十四日の「花の御会」で宗匠を務めた。その後、師匠の青蘿が三眺庵で容体が悪化し、六月十五日には五艸は福崎から加古川に駆けつけ、師の身の回りの世話にあたった。その様子は『水の月』（寛政三年冬、不木序、蘭更跋）所収の玉屑筆「青蘿居士終焉



【図1】『水の月』表紙と「青蘿居士終焉記」

「記」に、

十五日より淡路の我白・兵庫の岩
苔章古・姫路の花瓦宗居・剣坂の
花樵・米五・福崎の五艸・三木の
如鏡など庵中詰て起居を助く。各
心神にかけて祈禱をなす、ほ句と
も多し、中にも木水老人か吟桃岐
持來りてよみあけたり

涼風に雲吹はれて水の月 木水
こゝろひとつに夏の朝貌

と言下に脇ありしは十六日の朝な
り。次第に頼みすくなく、終に十
七日午の刻はかり、正念にして燈
の消るかごとく息風絶ゆ。

とあり、五艸は各地から参集した門
人らとともに「起居を助け」、青蘿

の最期を看取ったようである【図1】。

その後、初七日の六月二十二日に加
古川寺家町の光念寺で興行された「追
善之俳諧根本式百韻」に連衆として
参加し、追悼の句を「亡師終焉を傷
る句初七日迄」（『水の月』所収）
のなかで、

面影や四海に照りて夏の月

福崎 五艸

と詠み、師の青蘿の死を悼んだ。

青蘿没後、栗の本の号を継承した
玉屑とも引き続き俳交を重ねた五艸
は、玉屑宗匠ら栗の本系の俳人らと
ともに、京の二条家俳諧興行の花の
御会（寛政五年四月十四日、同六年
三月二十六日、文化八年四月七日）
に三度も連衆として名を連ねている。

志水五艸は栗の本系の俳人として、
しばしば俳書に登場し、一八世紀後
半から一九世紀初めにかけて青蘿・
玉屑宗匠からかなりの評価を受けて
いた俳人だった。彼の幾つかの句を
俳書から示そう【表II】。

飛石に香のこほれけり雨の梅

（元智編『蓬萊帖』）

薄雪や又なつかしきあらし山

（李雨編『骨書』）

あざやかにむくげ花咲く且哉

（一茶編『たびしうゐ』）

名月に光りにすけり海の底

（玉屑編『散はな』）

散花の皆鮎となるか大井川
（玉屑編『湯のはな集』）

【表II】江戸期の栗の本系の俳書に見える福崎の俳人

俳書	出版年	福崎の俳人
兩人編『秋しぐれ』	安永元(1772)年	呑口・仙魚(新町)
李雨編『骨書』	天明7(1787)年	五艸(新町)…志水氏
元智編『蓬萊帖』	天明8(1788)年	五艸(新町)
玉屑編『水の月』	寛政3(1791)年	五艸(新町)
玉屑編『道の燈かげ』	寛政5(1793)年	五艸(新町)
一茶編『たびしうゐ』	寛政7(1795)年	五艸(新町)
玉屑編『散はな』	寛政7(1795)年	五艸(新町)、白鷗(大貫)
玉屑編『湯のはな集』	文政元(1818)年	五艸(新町)
玉屑編『あふち日記』	文政2(1819)年	五艸(新町)

俳額に見える俳人

絵馬の一つに俳額（俳諧額）があ
る。俳額には、地域から発句を募つ
た句合奉納額、特定の俳句結社（風
羅堂など）を中心とする句合奉納額、
俳号の継承を記念した奉納額、立机
を記念した奉納額など様々な性格を
持っている。この地域には、雑俳や
風羅堂系の結社を中心とした奉納額
が比較的多い。

福崎地域以外の俳額であるが、神
河町中村の法楽寺には四面の俳額が
あり、その中で地元の名を散
見できるものがある。「奉納金栗山
観音堂」と題された享保二一年（一

七三六）在銘の俳額（縦五三、幅一
九九センチ）では、福崎の北の屋形
村（市川町屋形）の寒嵩・岸山・一
柳・鶯舌・濁水・一風・書水らの名
が見え、川辺村（市川町川辺）の一
亀らの名も見える。また、寛政六年
（一七九四）在銘の「奉納千吟集
折句笠付」と題された俳額（縦四〇、
幅二一六センチ）では、長目村の虎
嘯、福田村の亀翁、板坂村（福崎町
板坂）の指月らの名も散見される。

また、市川町下瀬加の庚申堂には、
享保一〇年（一七二五）在銘の俳額
（縦四三、幅一九五センチ）がある。
撰者は吟耕庵桃牛と記され、彼は寒
瓜編『芭蕉翁半百忌 雪の棟』にも
入集している福崎の吉田村の人であ
ろう。また、当額には辻川の桃酔や
桃軒の名も見える。

福崎にある江戸期の俳額は六面あ
る【表III】。その中で現存する最古
の俳額は、福崎町福田の三宮神社に
ある寛政六年（一七九四）九月の銘
がある「折句冠附三千吟集」と題し
たものである。当額は

媚容姪しい鶯が鷹を産

辻川 虎哉

にはじまる五十韻を連ねたもので、
これらは江戸期の娯楽的要素の強い
庶民文芸である雑俳と呼ばれるもの
である。地元福田村の蘭窓・虎直・

【表Ⅲ】江戸期における福崎の俳額一覧

奉納年	撰者(評者)名	所在地	寸法
明和2(1765)年以前	丹頂堂寒瓜ら	福崎町西谷・大歳神社	(亡失)
寛政6(1794)年	地元俳人の五十韻	福崎町福田・三宮神社	50cm×190cm
天保9(1838)年	丹頂堂(守三)ら	福崎町西谷・大歳神社	43cm×195cm
天保11(1840)年	此君・未石ら	福崎町西谷・大歳神社	85cm×194cm
天保13(1842)年	雪洞舎錦水ら	福崎町高橋・広田神社	32cm×180cm
嘉永4(1851)年	風羅堂(守三)ら	福崎町余田・大歳神社	74cm×192cm

孤松・義又らの俳人の名が、墨書された跡からかすかに読み取れる。

その他の俳額についても述べよう。福崎町西谷の大歳神社には三面ある。天保九年(一八三八)在銘の丹頂堂守三らが撰者となったもの、天保一年(一八四〇)在銘の此君や未石らが撰者となったもの、年号不詳の丹頂堂寒瓜らが撰者となったものである。同町高橋の広田神社には、天保一三年(一八四二)の雪洞舎錦水

らが撰者となったものがあり、同町余田の大歳神社には、嘉永四年(一八五二)在銘の風羅堂守三らが撰者となったものがある。これら六面の俳額は、いずれも風羅堂系によった宗匠たちが撰者となっている。すなわち、井上寒瓜(別号は丹頂堂第二世・春曙庵第二世)、葛垣守三(別号は丹頂堂第七世・春曙庵第七世)、雪洞舎錦水、葦屋南楠らである。

おわりに

以上、風羅堂系と栗の本系の俳書と地元に残る俳額を手掛かりとして、江戸期における福崎の俳人についての素描を試みた。

近世の俳諧は一七世紀後半、「俳聖」松尾芭蕉翁によって完成されたものである。わずか一七文字の発句の簡潔さが、当時の庶民には生業の傍らの余技として身近に親しめる文芸として大いに受け入れられたのであろう。播磨各地にも多くの俳諧宗匠を生み、彼らを中心として俳諧社中や連中が形成され、俳諧人口の裾野を広げた。大坂や京の本屋からは夥しい俳書が出版され、私家版のものも刊行された。さらに、神社仏閣には多くの俳額が奉納されたのである。

俳書に見える地元の俳人について

は、一七世紀末頃から井上千山・寒瓜父子を中心とする風羅堂系の俳書に多く入集している。入集している俳人を村ごとに示すと、福崎では西治村の竹翠軒風聲・風聲の妻むら・一葉・不省・拳桃・橘古・つね女・桃雨・里桃・風偃庵野艸、福田村の味愈・麦笛、高橋村の不及・桃雫、新村(新町)の闇鳥・竹秋亭丹翳・有之・鳳翳・哲翳・呑口・仙魚・賤一・丹之、井ノ口村の寸竜・豊風、吉田村の桃牛・拾禾・夫丸・子鳳・小汐女、辻川村の桃醉、八反田村の素牛・梅玉・拾男、長目村の梅月ら

がいた。
風羅堂系の俳人で、この地方の指導的立場にあったのは竹翠軒風聲(一六七〇頃〜一七五〇頃年)である。千山・寒瓜父子が編んだ数々の俳書に登場し、自らの出身地である西治において妻のむらをはじめ多くの俳人を育てている。

一八世紀後半からは松岡青蘿・玉屑を中心とする栗の本系の俳書にも入集している。俳人の村別分布は、福崎では新村(新町)の志水五艸、大貫村の白鷗、西谷村の一貫、余田村の竹葉らである。

栗の本系の地元の俳人で、特筆すべき人は志水五艸(一七六〇頃〜一八二〇頃年)であろう。五艸は青蘿

の高弟の一人であり、彼の没後、栗の本第二世を継いだ玉屑とも濃密な俳交を重ね、京の二条家俳諧にも幾度も連衆として参列した実力ある俳人であった。

俳額調査から俳人を探っていくと、多くの地元の俳人の名が散見できるが、長い年月で墨痕が薄れ、額面が黒く変色し、また細字のため判読が極めて困難な状態にある。また、絵馬の中でも俳額は地味な存在であるため、大切に保存されることなく近年になって亡失してしまったものも少なくない。しかし、俳額は郷土の俳諧史の研究にとって貴重な第一級の史料であり、後世まで大切に保存されることを切に願っている。